

キャリア教育におけるシステムを活用した 講義レポートへの個別フィードバックの実施報告

松 木 利 憲

Report on Individual Feedback of students' deliverable for lecture via the System in Career Education

Toshinori MATSUKI

要旨

電気通信大学の倫理・キャリア科目である 1 年次開講科目キャリア教育基礎および 2 年次開講科目キャリアデザインでは、学生にキャリアおよび自己理解などキャリア教育のテーマを踏まえた講義レポートの提出をさせている。提出したすべてのレポートに対し、独自システムを用いて個別のフィードバックを返す仕組みを構築している。2016 年の改組後、文章の書き方への指導を強化し、フィードバックの量にも変化が起こった。この報告では、キャリア教育の低学年時科目でのフィードバックの状況と学生からの評価を記載する。

キーワード：アカデミックライティング、アクティブラーニング、初年次教育、キャリア教育、学習ポートフォリオシステム、フィードバック

Abstract

In this report, touch on the changes in student behavior and the evaluation of lectures by promoting Active-Learning in First-Year ethics/career education subject. In general, there are many cases where active learning such as PBL is introduced in career education subjects. PBL was introduced in the career education that were held in First-Year as a required subject of the University of Electro-Communications ethics/career education subjects. Along with the reorganization, Seminar for Career Education of the required subjects to Career Education Basic of the elective subjects, and promoted Active Learning through an increase in the number of lecture-style lectures from the content of PBL subjects. In the process of transitioning from compulsory courses to elective courses, will report on the effects on class evaluation caused by the promotion of Active Learning while amount of Active Learning time changes.

Key words : Academic writing, Active learning, First-year-education, Career Education, e-Portfolio System

1. はじめに

本報告は、国立大学法人電気通信大学（以後、本学）の倫理・キャリア科目「キャリア教育基礎（以降CEB）」および「キャリアデザイン（以降CD）」で行われている教務補佐員教育ボランティア（以降学内呼称の特任講師）からのフィードバックを報告する。

1-1. フィードバックに関する先行研究

システムを活用したフィードバックの先行研究としては、伊豆原ら（2009）により、提出物の好意的な反応が授業評価を向上させる示唆が示されている。[1]

また、北澤ら（2010）によれば、フィードバックの有無により、システムの利用と授業の成績に影響を直接的に与えるとともに、システムの利用が課題や成績に対する意識に影響を示している。[2]

中原（2017）による定義では「耳の痛いことを部下にしっかりと伝え、彼らの成長を立て直すこと」としており、情報通知、建て直しの働きかけをフィードバックの中の要素と定義している。[3]

情報通知とは「パフォーマンス等に対して情報や結果を通知すること（現状を把握し、向き合うことの支援）」であり、立て直しとは「部下が自己のパフォーマンス等を認識し、自らの業務や行動を振り返り、今後の行動計画をたてる支援を行うこと（振り返りと、アクションプラン作りの支援）」としている。

服部（2021）によれば、「自分の意見やアイデアに対して教員などからフィードバックされる機会」は、大学内での多様な学習経験との相関が示されている。[4]

学生は多様な経験に対し、キャリア科目の中で改めて振り返りを行い、言語化したレポートに対するフィードバックから多様な学習経験を認識しなおしていると考えられる。

1-2. 電気通信大学のキャリア教育

本学のキャリア教育科目は2005年度に自由科目として開始した。[5] 2011年より2015年まで倫理キャリア科目として卒業要件として10単位を課していた。CEBの旧科目キャリア教育演習は必修科目であった。2016年の学科改組以降、倫理キャリア科目は卒業要件4単位となり、CEBは選択科目となった。

CEBは、倫理・キャリア科目のうち1年次で履修可能となっている唯一の科目である。履修者数は表1のとおりである。特任講師によるきめ細やかな対応を実施するため、特任講師数による履修制限を行っている。

履修制限は、2016年にキャリア教育検討ワーキンググループによる答申において担当学生数を最大20名と規定されており、履修者は、特任講師の人員だけでなく、

表1 キャリア教育の履修者の推移

入学年度	1年次CEB履修			2年次CD履修			連続履修者数
	履修者	特任講師数 (教室数)	特任講師あたり 担当 学生数	履修者	特任講師数 (教室数)	特任講師あたり 担当 学生数	
2016 (H28)	594	18 (7)	33	213	17 (8)	13	151
2017 (H29)	260	13 (5)	20	218	20 (10)	11	25
2018 (H30)	285	17 (8)	17	197	18 (9)	11	39
2019 (H31)	298	18 (9)	17	185	16 (8)	12	26
2020 (R02)	253	20 (10)	13	192	16 (8)	12	35
2021 (R03)	306	18 (9)	17	273	14 (7)	20	68
2022 (R04)	256	16 (8)	16				

※2020年度前期CEBは完全遠隔講義（Zoom）で実施

CEBにて夏季集中講義として実施されている事業所見学（2020年以降はコロナ感染症対応でオンラインによる遠隔による懇談会となっている）の人数制限がある。2016年のキャリア教育検討ワーキンググループ（以下キャリア教育検討WG）による答申に沿って履修者数の制限を実施している。

レポートの添削講評の実質化を図る。レポートなど「文章の書き方」については、全体講義の1回を行うほか、講義回によってレポートが課されている。クラス人数を20名と少人数制にすることにより、レポートの書き方についての指導を充実、徹底させる。

「学生のコミュニケーション力、技術者教養力の強化」として、上記の最終答申でレポートの書き方が具体的なアクションとして提示され、具体的講義内容として「文章の書き方」の導入を1年次CEBと2年CDで行った。

CEB、CDとも、旧科目の2011年の講義開講当初から、システムを活用した特任講師によるフィードバックの仕組みを導入しており、10年以上の実績を持つ。表1では各科目の特任講師数を掲載しているが、2015年以前の必修科目時は、70名を超える特任講師を任用していた。ただし、現状のようなフィードバックに関するFDは十分行われていなかった。2016年の改組以降、FDの改善を進めた。

2. キャリア教育を構成する要素

2-1. 教職員など

キャリア教育の大きな特徴として、教員と特任講師の役割分担がある。教員は科目の企画、講義コンテンツ

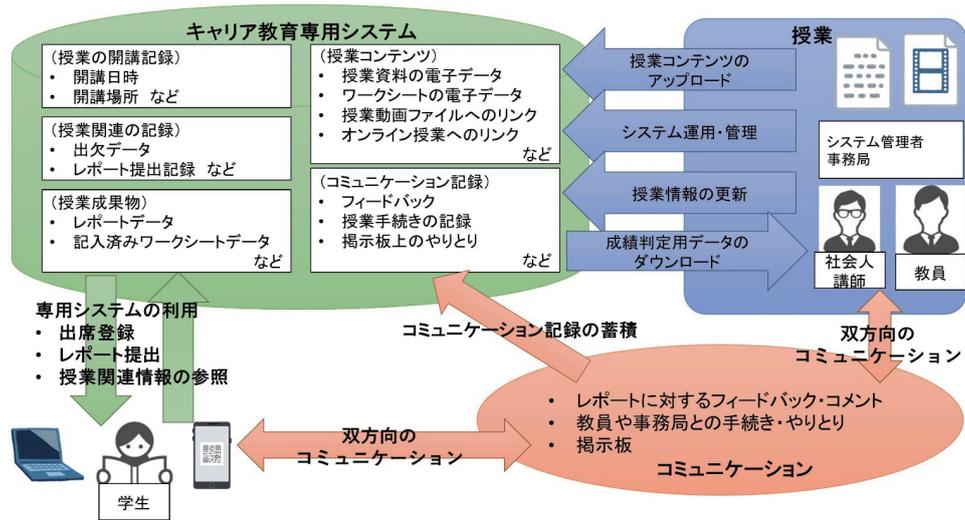


図1 @Univの構成

の作成、成績判定、特任講師へのFDを担当し、特任講師は、教室での少人数制ワークショップ講義のファシリテーションおよび学生への講義レポートへのフィードバック、講義時の学生の言動評価を担当する。

特任講師は、民間企業等の社会人経験を任用している。特任講師は、学生担当数の最大を20名としている。きめ細かい対応が可能となる。

2-2. 学習ポートフォリオシステム (@Univ)

キャリア教育では、2011年より、独自の学習ポートフォリオシステム (@Univ; アットユニヴと呼称。以下システム) を使用している。このシステムは、電気通信大学キャリア教育の運営を主眼としたものであり、特任講師、学生とのコミュニケーションを促す、利便性の高いものにしてている。[6]

講義のコンテンツとなる講義資料(プレゼンテーション等の配布資料)やおよび、学生のアウトプットとなる電子データで提出される講義レポートおよび、紙媒体で提出される事前学習用ワークシート、講義用ワークシートが格納されている。また、学生と教員、事務局間のフィードバックや、事務連絡なども含めたコミュニケーションも保存されている。これらのデータは、講義終了後も閲覧可能となっており、将来の就活等に活用が可能である。

3. フィードバック

3-1. 講義の流れ

CEB、CDでは、各回の講義で前回の講義で配布した事前学習用ワークシート(宿題)を基に講義内でグループワークを行い、講義用ワークシートに記入を行う。

学生は、講義翌日までに、講義レポートをシステム

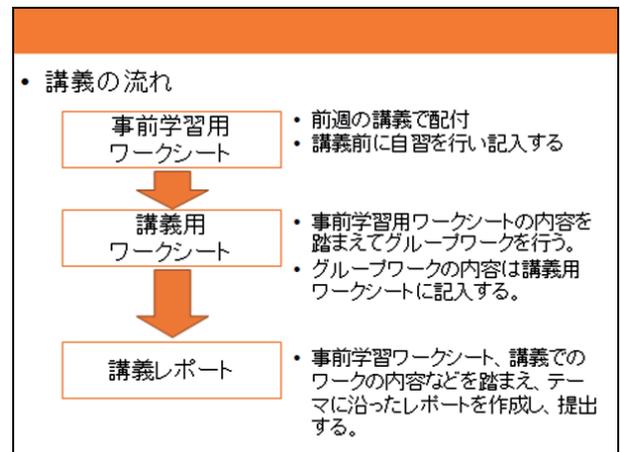


図2 講義の流れ(学生への配布資料)

上に入力して提出する。入力された講義レポートに対して、特任講師は次回の講義までに講義レポート内容に即したフィードバックをシステム上から行う。

3-2. 電気通信大学キャリア教育でのフィードバック

電気通信大学でのキャリア教育では、システムを活用したフィードバックを立ち上げ以来行ってきた。

キャリア教育科目では、毎回の講義で、学生にアクションラーニングを導入した講義内でのワークを基に、振り返りをレポートとして提出する。レポートに対して講義のファシリテーターを勤める特任講師から、システム上でテキストによるフィードバックを行う。

フィードバックの流れとしては、表2のとおり、月曜日1限の講義後、火曜日深夜0時を期限とする学生のレポートの提出を経て、特任講師からのフィードバックを行う。フィードバックの期限としては、次回講義前までに学生が参照できるようなタイミングで完了するようにしている。

表2 フィードバックのスケジュール

曜日	アクション
月曜日	講義日
火曜日	レポート提出期限
水曜日	レポート出揃う
木曜日～日曜日	フィードバック入力期間
月曜日	次の講義日

講義情報

コース名	2021キャリアデザイン
講義名	12_キャリアデザインマップ(2)
講義日時	2021/12/27 09:00
レポートテーマ	(1) 自分にとって、キャリアデザインマップを作る目的は何か。何を明確にしていきたいか。(400字以内) (2) また、そうなるためには具体的などのような行動(経験)をしていくか。(400字以内) ◆提出期限: 講義翌日の23時59分まで ◆提出方法: @Univにログインし提出すること。 https://uec.atuniv.jp/
講義資料	21CD12第12回[WS]キャリアデザインマップ(2).pdf, 21CD12第12回講義用ワークシート.pdf

出席レポート

1. 必須	自分のキャリアデザインマップを作る目的は主に自分の目標とそれに至るまでの道筋を体系的に視覚化することで整理しやすくするためである。自分にはなにか努力してたり着く目標があってそれを目標として何かアクションを起こそうというときに行きあたりばったりとその時思いついたことを中途半端にやっただけという事が幾度となくあったので、キャリアデザインマップを活用することで現在の自分が目標までの道筋のどこにいて何がどれだけ足りていないかを視覚化していきたい。また、歳を重ねても新しいことに貪欲であるための道筋をキャリアデザインマップを活用することで明確にしていきたい。理由としては、これまでの自分の保守性が悪い面での生活に出ていてこのままだと社会人になってから時代に取り残されるのではという危機感が出てきたから、などが挙げられる。
文字数	361
2. 必須	自分が新しいことに貪欲であるために主に3つの行動指針を掲げたいと思う。1つ目は若い世代と交流を持つという点である。具体的行動としては常に新陳代謝のあるコミュニティに所属し続けるなどを行いたいと考えている。理由は古い価値観を壊して新しいことを作り出していくのは若い世代であるからである。2つ目は様々な思想への幅広い知識を持つという点である。具体的行動としては大学生の間に1週間に1冊は思想に関する本を読むなどが挙げられる。理由は若いうちに様々な知識を受け入れる受け皿を作っておくことで以降の人生で得られるものが増えるからである。3つ目は自分には無理だなどと思う物への対応力を鍛えるという点である。具体的行動としては大学生のうち苦しい人と積極的に絡むなどが挙げられる。理由はどうしても無理なものに触れたときのダメージを最小限に留めるとそれ以降のインパクトへの影響も抑えられるからである。
文字数	391

提出日時: 2021/12/28 19:41

コメント

1910XXX oo oooさん

松木です。
レポート提出おつかれさまでした。
今回のレポート内容は、キャリアデザインマップ記入の大きな材料となると思います。活かしていきましょう。
視覚化はいい視点だと思います。将来の姿に対して、何が足りてないのか、そのために何をすべきなのか明確になると思います。
飽きっぽい点については、実際、やっていなかったことで後悔したことがあれば問題ないかと思いますが、むしろ、何かを捨てて新しいことに取り組める時間を確保できる要因とポジティブ捉えることもできるでしょう。
2. の内容については、字数の制限もありますが、もっと考えを掘り下げられると思いました。記述された内容の間に、Why(なぜ?)とSo What(だから何?)を問うてみるといいと思います。

次回講義は1月18日の3限です。オンラインでこれまでと同じZoom MeetingRoomで行いますので、よろしくお祈りいたします。

松木 利憲-2022/01/13 13:20

ワークシート



図3 @Univのフィードバック例

図3は、実際のシステム上のコメント欄にフィードバックが表示された画面イメージである。

2022年度、特任講師に向けたFDでは、学生へのフィードバックに関して、以下の内容を伝えている。「特任講師から」とは、講義テーマに関して社会人出身者の特任講師が講義内で行う10分程度の講話である。

大教室が多い大学での講義の中で、レポートへのコメントは個別の学生へのフィードバックを行える数少ない機会です。講義で行っているアクティブラーニングとともに、学生の講義での学びを深めるものになりますので、講義内容および講義での「特任講師から」を踏まえて、レポートテーマを踏まえて提出された内容を受容した上でのコメントをお願いします。

フィードバックの内容に関しては、中原(2017)による情報通知、建て直しに沿ったものになっている。表3のように、学生のテーマに対する志向に沿ったレポート内容と、その表し方となる文章の書き方に分けている。

ここでは、学生の講義およびレポート提出に対する心理的安全性を担保するため、内容に対して受容する。受容とは、坂柳(2007)によれば、「人間の独自性・代理不可能性を尊重して、クライアントのあるがままを認識しようとする態度である。これは、単に、クライアントの長所を承認したり、意見に同調したりすることではなく、長所も短所もすべて含めて、そのクライアントのあるがままを認識しようとする姿勢のことである。」「[7]

レポートを構成する文章の書き方に対するフィードバックは表4に示した文章の書き方の評価項目に沿って行っている。文章の書き方のフィードバックは、中竹(2017)による振り返りのフレーム Good / Bad / Next を使用している。[8]

Good / Bad / Next のフレームワークとは、Good = よかったこと、Bad = よくなかったこと、改善が必要なこと、Next = 今後につなげること、Good をどう継続するか、Bad をどう改善するか、である。中竹によれば、無自覚に振り返りを行う場合、改善が必要なこと = Bad を多くあげがちである。

このフレームワークをキャリア教育にて適用するにあたり、Good で示される良かったことに触れて、次につなげる Next を示すようにしている。尚、この Good / Bad / Next は、表4で示す文章の書き方への評価の

表3 フィードバックの内容

	レポート内容	文章の書き方
情報通知	- レポート内容に対する受容	- Good (よかったこと) / Bad (よくなかったこと、改善が必要なこと) の指摘
立て直し	- 更に考えてもらいたい事象の指摘 - 今後の行動への示唆	- Next (今後につなげるためのこと、Goodの継続、Badの改善) の指摘。

み使用し、学生がキャリア教育のテーマとして記載している内容に対する評価は行っていない。これは、学生の考える志向を尊重し、教員側で、何らかの正解となる価値観を示すことが適切でないと考えためである。

表4 文章の書き方の評価項目

構成	1.	字数を満たしているか(制限文字数の80%以上)
	2.	結論が課題に対して合致し明確になっているか
	3.	結論には適切な理由・根拠が示されているか
文章	4.	文章の論理的なつながりができているか
	5.	具体性のある内容になっているか
	6.	主語、述語が正しく使用されているか
文字	7.	誤字・脱字(変換間違い)はないか

4. フィードバックの効果

4-1. 学生による授業評価における学生からの反応

4-1-1. 定量的なデータ

講義終了時に学生による授業評価を実施しており、自由設問として「講義内および学習ポートフォリオシステム上での特任講師のコメントやフィードバックは講義内容の理解や自身の大学生活に向けて役立ったと思いますか。」を設定した。設問は、5(文章を書く力が向上した)から1(文章を書く力が向上しなかった)の5段階の選択項目となっている。2016年以降の履修学生の評価は図4の通りである。

「役立った」「やや役立った」と回答した学生が増加し、「どちらとも言えない」と回答した学生が減少している。結果、評点としては、増加傾向にある。2020年度は評点において減少している。2020年度CEBは完全遠隔講義になっておりオンラインで十分な回答数がなかったことが一因と考えられる。

図4 フィードバックの学生からの評価

4-1-2. 定性的な評価

2021年度、CEB履修の学生からの最終講義レポートにおいて自由記述欄として、特任講師に向けたメッセージと求めた際に、下記の記述がみられた。

- ✓ 毎回の出席レポートで丁寧なコメントありがとうございました。
- ✓ 自分の発表やレポートに自信を持てずにいましたが、特任講師の先生は発表、レポート課題の一つ一つに励みになるような感想を述べてくださったため、自信につながりました。ありがとうございました。

- ✓ よいところはよい、ダメなところはダメとはっきり教えてくださりありがとうございました。また、毎回のメールによる返信を見たときにちゃんと読んでくださっているなど感じるようなものばかりでやりがいを感じていました。半年間ありがとうございました。
- ✓ 先生もお時間がない中で私たち一人一人のレポートを添削、さらにはフィードバックも付けてくださり毎週レポートを書くモチベーションとなりました！この講義をとって心から良かったと感じております、本当にありがとうございました。今後も先生に教わった人生に無駄なことはないという言葉に胸に多くの経験をしていきたいと思います！
- ✓ キャリア教育基礎の授業は授業の体制やレポートのチェックなど、ほかの授業よりも非常に面倒見が良い印象でした。
- ✓ ○○先生にはメールの確認とレポートへのコメントをしていただきありがとうございました。おかげさまで自分でもすこし文章を書くことが得意になったと思います。
- ✓ 私の拙い文章を読み、丁寧なコメントをいただきありがとうございました。
- ✓ レポート提出後の先生からのコメントを見るのが楽しみでした。
- ✓ レポートへのフィードバックがとても参考になった。
- ✓ 先生も毎回レポートをかなり長めにコメントして下さりありがとうございました。
- ✓ ほかの講義より、この授業の先生はいつも詳しいコメントが書いてくれて、単なる私的ではなく、できるようになったことも気づいて、それなりの評価をしてくれました。おかげで、勉強へのモチベーションも高まった。本当にありがとうございました。
- ✓ 特に、レポートの書き方について、今まであまり添削してもらえない機会がなかったため、毎回の添削で指摘を頂けたことがとても有難かったです。
- ✓ お忙しい中、毎回のレポートへの丁寧なコメントありがとうございました。私は、コメントからも得たことが多くありました。

4-2. 特任講師のフィードバックの状況

今回、2016年度～2021年度のCEB、CDを担当した64人の特任講師が学生に対し行った41,773件のフィードバックを分析する。

フィードバック文字数は、特任講師からのレポートへのフィードバックとともに、事務連絡も含まれる。事務連絡には、レポート未提出の際の提出督促の連絡や、遅

れ提出の際の連絡、欠席の際の対応の連絡なども含まれており、概ね文字数は少なくなる。

現時点では、レポートへのフィードバックと事務連絡の分類はできておらず、一律に扱わざるを得ない。そのため図5、図6のエラーバーで示されるように誤差がかなり大きくなっている。

ただし、CEB、CDともに、年々文字数は増加する傾向にある。これはFDにおけるフィードバックへの明確な指示が一因と考えられる。また、担当学生数の多寡も影響すると考えられる。2021年度CDは、表1にもあるように、特任講師のひとりあたりの担当学生数が20名と、例年と比較してかなり多くなっている。1-2. で触れた、キャリア教育検討WGの答申にあった20名に沿った対応であったが、現実的には、ひとりあたりのフィードバックの文字数が影響したと考えられる。

図7、図8では、科目ごと年度ごとの特任講師が、学生ひとりあたりに記入したフィードバックの文字数を度数分布で示したものである。

傾向として、CEBよりもCDで文字数が多い。これは、CDが将来を考え、自己理解を促す教室でのグループワーク主体とした講義となっており、特任講師との密なコミュニケーションが発生しやすい。特任講師からの

フィードバックもしやすい講義内容も要因となるだろう。

年度毎の推移では、図5、図6で年々平均の増加が示されているが、度数分布でも全体に増加傾向が示されている。

ここで、特任講師毎の変化も見てみる。表5、表6のA~JはそれぞれCEB、CDを3年以上担当した特任講師である。複数年同科目を担当し、経年変化を見られる。

A~Jの特任講師のバックグラウンドは、表7に示した通りである。2016年度CEBでは200字余りであったフィードバックが、2021年度には、2倍以上の400字を超える文字数となっている。

キャリア教育では2016年以降、アクティブラーニングを促進している。[9] グループワーク、発表等の機会増加により講義内での言動がつかみやすくなり、また、FDによる明確なフィードバックの方法の提示により、に対し、特任講師からのフィードバックが容易となった。

逆に、完全オンライン（遠隔講義）となった2020年度CEBでは、学生個々のグループワークでの活動が、十分に特任講師に把握できなかったことで、文字数が減少している。

CEB フィードバック平均文字数の推移

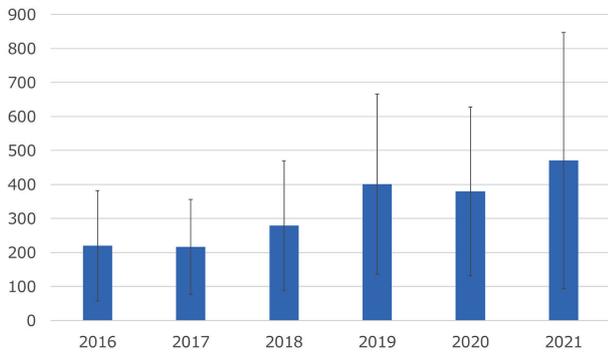


図5 CEBのフィードバック平均文字数の推移

CEBフィードバック文字数の分布

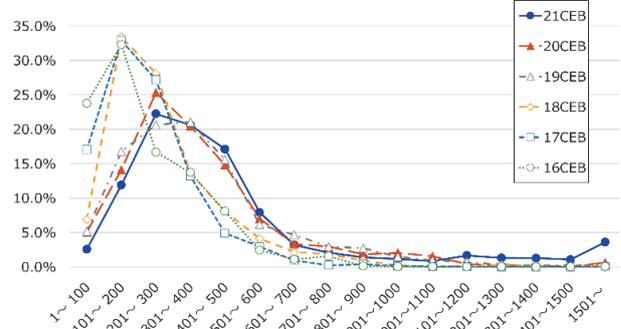


図7 CEBフィードバック文字数の度数分布

CEB フィードバック平均文字数の推移

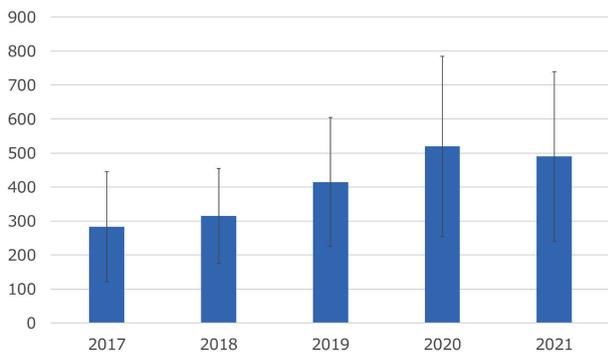


図6 CDのフィードバック平均文字数の推移

CDフィードバック文字数の分布

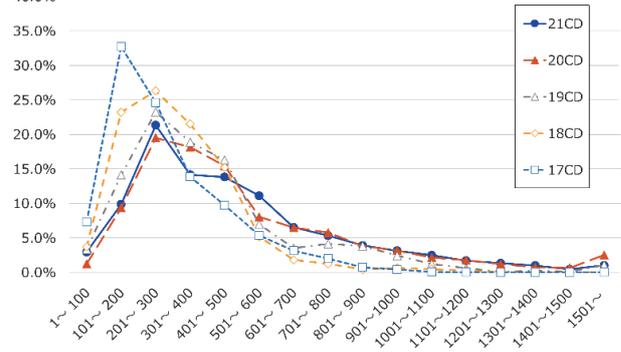


図8 CDフィードバック文字数の度数分布

表5 CEBにおける継続任用されている特任講師のフィードバック文字数の推移

講師	2016	2017	2018	2019	2020	2021
A	—	—	555.2	591.2	529.2	433.9
B	126.3	182.2	205.6	193.1	318.2	—
C	151.8	267.0	429.7	594.7	641.8	717.6
D	105.3	141.4	170.7	274.7	217.2	195.5
E	—	208.5	228.2	265.5	309.8	—
F	—	278.2	319.2	378.3	331.5	—
G	—	240.7	242.9	219.3	—	—
H	—	—	349.1	396.2	409.4	413.7
I	—	—	511.8	787.7	989.6	1227.7
J	—	—	124.5	179.7	242.5	245.9
全体平均	219.9	216.1	279.2	400.8	379.7	470.5

表6 CDにおける継続任用されている特任講師のフィードバック文字数の推移

講師	2016	2017	2018	2019	2020	2021
A	改組のため開講せず	563.2	511.0	532.4	561.9	547.9
B		147.9	346.0	201.5	—	—
C		458.7	486.4	708.4	961.6	933.1
D		182.7	276.8	308.5	250.9	341.5
E		200.1	241.8	228.3	351.2	—
F		274.1	364.8	392.9	—	—
G		329.2	277.1	291.0	—	—
H		—	383.8	397.7	399.2	525.2
I		—	623.6	872.9	1108.9	1054.4
J		—	206.9	226.6	231.5	197.4
全体平均	282.8	315.0	414.8	519.6	490.0	

表7 特任講師の経歴

講師	講師の経歴
A	文系。製造業（人事）出身。2014年より参画。
B	文系。金融出身。2022年度後期より他大学転出。
C	文系。製造業出身。
D	文系。金融等出身。
E	文系。外資系金融出身。2020年度で定年。
F	理系。外資系IT等出身。2020年度で定年。
G	理系。院卒。製造業出身。2019年度で定年。
H	理系。院卒。製造業（研究開発）出身。
I	本学卒業生。製造業・IT出身。
J	理系。金融系SI（エンジニア・人事）出身。

5. 今後の課題

5-1. システムの変更

システムは、現在導入後12年を超えており、開発運用を担当するベンダーから、セキュリティ上のリスクを指摘されており、運用の継続が危ぶまれている。現在、学内でのLMSとして運用されているWeb ClassやGoogle Classroomは、学生へのフィードバックに関する機能、レポートとフィードバックの一覧性など弱い。

今後、システムが継続できない場合、Google Classroomへの移行も選択肢である。キャリア教育科目3年次開講科目のキャリア教育リーダーは既にシステムからGoogle Classroomへの移行を完了している。Google Classroomは学期ごとの考え方が強く、科目間の連携など弱い点で、キャリア教育科目の強みが発揮しにくい。

5-2. コロナの影響

2020年度前期はCEBがすべての講義でZoomによるリアルタイム遠隔講義として開催となった。2020年度前期のCEBでは、前年後年と比較して全体の平均文字数が減少している。これは、Zoomにより講義内での言動が見えにくくなったことが一因と考えられる。ただし、さらなる検証も必要である。

5-3. さらなる分析の必要性

今回、助成確定後、システム管理会社へのデータ抽出の依頼が遅れた。加えて、受領したデータ内容に不足があり、再度の抽出依頼により分析作業の開始が遅れた。

現在、手元にあるデータとして、2011年度以降のシステムを使用した科目すべてのフィードバックの情報があり、今回行った2016年以降のフィードバックと2015年以前との比較や、フィードバックの質的分析により教育改善につなげたい。特に、授業評価とフィードバック内容もしくは量との関連性なども分析が必要である。全体として、フィードバック量、質の検証が必要である。

5-4. FDへの反映

2016年度以降、特任講師へのFDにて、フィードバックの方法への改善を進めてきた。今後、フィードバックに関する定量的な分析を進め、課題が明確になる可能性がある。分析により、今後の内容の改善も見込めるであろう。

具体的には、学生へのフィードバックの量と学生からの講義への評価に関する関係性を検討していく。また、フィードバックの内容、つまり言葉の選び方や文章の構成へも同様の検証を進める。ここから、学生の教育効果を高めるフィードバックを明らかにできる可能性がある。

特任講師により、毎回学生に対し、1000字を超えるフィードバックも行われている。学生にとって効果のある文字数(量)の検証も、質の検証とともに必要であろう。

参考文献

- [1] 伊豆原久美子；向後千春：eラーニング授業におけるレビューシートの利用が授業評価に及ぼす効果，日本教育工学会論文誌33 (Suppl.)，53-56, 2009
- [2] 北澤武，永井正洋，上野淳，大学情報教育のブレンディッドラーニング環境におけるeラーニングシステムを用いたフィードバックの効果，日本教育工学会論文誌 34 (1)，55 - 66, 2010
- [3] 中原淳，フィードバック入門 耳の痛いことを伝えて部下と職場を立て直す技術（著）PHPビジネス新書 2017-02-17
- [4] 服部康宏，仕事に必要な力を学生時代に高める，リクルートワークス166（第27巻2号）2021-06-10
- [5] 山田祥之，竹内利明，皆川昭俊：電気通信大学における産学官連携によるキャリア教育の取組み，工学教育，60-1, 2012-01
- [6] 山田祥之，電気通信大学におけるITを活用した産学連携による課題解決型授業の実例報告，電気通信大学紀要，30 (1)，44-51, 2018-02-01
- [7] 坂柳恒夫，キャリア・カウンセリングの概念と理論，愛知教育大学研究報告．教育科学 56, 77-85, 2007-03-01
- [8] 中竹竜二：特別な才能はいらないじぶんにしかできないスクールリーダーになろう，教育開発研究所，2017-08-01
- [9] 松木利憲，初年次キャリア教育科目のアクティブラーニング促進による授業評価への影響，電気通信大学紀要，32 (1)，1-9, 2020-02-01

本報告は「電気通信大学 令和4年度教育力向上の推進事業」の助成を受け行われた。